

Title	「知」と「真理」フーコーとラカンの隔たりについて
Sub Title	"Savoir" et "Vérité" : un essai sur la distance entre Foucault et Lacan
Author	岩崎, 洋介(Iwasaki, Yosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.78, (2000. 6) ,p.360(29)- 369(20)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0369

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「知」と「真理」

フーコーとラカンの隔たりについて

岩崎 洋介

衆知のようにフランスの構造主義は1950、60年代に隆盛を極めた。「構造主義」という語を誰に適用するかに関しては意見も分かれようが、このブームで「構造主義者」とのレッテルを、好む好まざるにかかわらず、貼られた者に共通することにはそれぞれ各分野の先行する世代の手法の客観性の欠如を批判し、人文科学の「科学性」を確立しようとしたことが挙げられよう。またそうした試みは対象自体に意味を見出すのではなく対象同士の間を重視することにより主観性を排しようとした。レヴィ＝ストロースは婚姻関係を数学の群構造に還元してみせし、ロラン・バルトはピカールとの論争で自身の科学性を主張し、アルチュセールは従来のマルクス主義からイデオロギーを払拭することを目指した。そして少なくとも初期のラカンにあってもフロイトへの回帰の旗頭の下に科学としての精神分析の確立が急務であった。そうした中、ジャーナリスティック的には構造主義の四天王の一人とされているが上記四人よりも歳下のフーコーはラカンとは25才歳が離れ、もっとも歳が近い（八才）アルチュセールとはノルマル時代に教師と生徒の関係にあった。そのフーコーがなんらかの分野の科学性の確立を目指したかは疑問であろう。またレヴィ＝ストロースの人類学、バルトの文学批評、ラカンの精神分析、アルチュセールのマルクス哲学、といった具合にフーコーを歴史学にくくってよいものか、という疑問に対し表明したのが1969年に発表された *L'Archéologie du savoir* である。ここでフーコーは己を構造主義とも従来の歴史学とも違う立場にあることを主張し、自らの試みを「考古学」と命名しているが無論ここで

の「考古学」とは一般的に受け入れられている意味とは異なっている。Archéologie を Archéo- と -logie に分け、Archéo- をフランス語の archives (文献) の意に解するのだが、もう一方の -logie, logos から期待されるような科学性は主張されない。フーコーはこの著作で構造主義隆盛期の代表的な著作とされる *Les Mots et les choses* (1966) でも一度も「構造」という語を使っていない、と自分は構造主義であったことはないことを主張するがその是非はここでは扱わない。しかしこれをもってフーコーを構造主義の文脈から外すのを躊躇するのはこの時期上記のような「構造主義」とみなされていたものからも科学性から離れる動きが見られるからである。すなわちこの時期、構造主義が確立しようとした科学性を問い直したのはフーコーに限ったことではないのだ。具体的にはラカンの《La science et la vérité》であり、理論的な表明はないもののバルトは *L'Empire du signes* (1970) 前後からその戦略を変えているし、アルチュセールは70年代に入りほぼ沈黙する。ここではこの時期のフーコーとラカンの〈science〉に対する距離を探っていきたい。ラカンが《La science et la vérité》で〈vérité〉の観点から〈science〉を捉えようとするならば、フーコーは *L'Archéologie du savoir* の対話の形式をとる結論 (V章) を除けば最後に位置する節を《science et savoir》と銘打った。ここでフーコーは〈science〉を〈savoir〉に解消しようと試みている。

フーコーの *L'Archéologie du savoir* は、本人の弁によれば *Les Mots et les choses* の直後から構想され、1967年8月に一度書き終えたようであるが同年末の *Cahiers pour l'analyse* および *Esprit* への回答を取り込む形で1969年3月に出版された⁽¹⁾。 *Cahiers pour l'analyse* は Ecole Normale Supérieure の Cercle d'épistémologie により1966年1月に創刊された機関誌であるが構造主義から影響を受けた世代によるその批判的継承により性格付けられている。上記ラカンの《La science et la vérité》が発表されたのもこの第1号でのことである。付言すればフランスにおける分析哲学の受容を促したのもこの機関の貢献と言えよう。

フーコーは従来のフランス認識論、バシュラールとカンギレムを踏まえている、を「科学を準備し同時に前に進むことに抵抗を示す前科学的次元を越えてまたはそれに反していかに科学が成立したのか、依然科学と対立していた障害や制限をいかに科学は乗り越えることが出来たのか」を探ることだとし、必然的に「真と偽、理性と非理性、障害と生産性、純粹と不純、科学と非科学の対立」によっていてそこでは障害、矛盾は何らかによって乗り越えられ（技術の発展、弁証法など）、最終的には到達された成果（科学）へ至る一貫性が求められる、とする⁽²⁾。それに対しフーコーの考古学は、

(L'archéologie) ne guette pas le moment où , à partir de ce qu'ils (les discours) n'étaient pas encore, ils sont devunus ce qu'ils sont ; Son problème, c'est au contraire de définir les discours dans leur spécificité ; de montrer en quoi le jeu des règles qu'ils mettent en œuvre est irréductible à tout autre⁽³⁾;

であり認識論における科学の確立のような一意的な方向を持たず、矛盾を解決しようとせずそれを分析、叙述するのだ（<on localise la divergence et le lien où les deux discours se juxtaposent... décrire les différents espaces de dissension>⁽⁴⁾）。またフーコーの興味はいかにしてそのような言説がある時代に可能であるのか、それを可能にした条件は何かにありなんらかの価値（例えば科学性）に照らして言説間での優劣をみるものではない。そしてフーコーはそうした条件を外から課せられたものとせず言説間の関係によって規定された「知 (savoir)」の形態に従うものとしている。そして科学が発生、確立するのもある時代、ある地域でのある知の配列の下で可能だったのだ。従ってフーコーの言う「知」とは必ずしも科学的なものではないし、必ずしも科学にかかわるものではなく、また科学を排除するものでもなく、科学を成立させるかもしれない（しないかもしれない）言説の総体である。そうした言説は時代的、空間的に限定されたそれぞれ独

自の規定に従っている。そうした規定を考古学は分析しようとしている。よってその分析対象として「科学的テキスト同様「文学的」, 「哲学的」テキストも」扱えうる。しかしそれを取り扱うのはテキストからなにか他のことを引き出すため、なにか他のことを証明するための document としてではなく、そこに現われている言説の条件, 規則, 関係を探るのだ ('document' に対し, フーコーは, カンギレムからの借用として 'monument' という語を当てている)⁽⁵⁾。

フーコーはある言説の総体の確立から科学が形成される課程を四つの段階, *seuil de positivité*, *seuil d'épistémologisation*, *seuil de scientificité*, *seuil de formalisation*, に分けている⁽⁶⁾。ある言説の関係が確立する, もしくはそうした関係が他の関係に変わる時点で *seuil de positivité* を越えた, とし, それによって規定された知の空間である言説が規範として支配的な機能を帯びる時点で *seuil d'épistémologisation* を越え, そうした支配的な言説が形式的な規範を持ち始め, それに則って言説が生成されることで *seuil de scientificité* を越えたことを意味し, そうした言説の空間が公理から発し形式的に決定されると *seuil de formalisation* を越えたものとする。実際のところ最後の *formalisation* が問題となるのはブルバキに代表される公理主義を念頭に数学においてしかない, とフーコーはしている。そしてフーコーによれば科学認識論が問題とするのは *seuil de scientificité* 前後の動きであり, 考古学の対象は *seuil d'épistémologisation* であり, 両者は次元が異なるのだ。考古学が扱うのは科学性が問題とされる前の段階であり (歴史的に科学が形成される前では必ずしも無い), 考古学は対象の科学性の有無を問題としないし自身の科学性を主張しない。フーコーの観点からすれば科学とはある言説空間に浮かび上がった知の一つの相貌ということとなろう。そして科学がその誕生以降規範としての力を強め我々の知において支配的な位置を占めるとしたらそれは後期フーコーの主題である権力分析の一つの対象となろう。そして科学が権力をいかに行使するか分析がなされる場合は言説空間においてである。

フーコーが科学をその特権的な位置から知の一形態に引き摺り下ろすことで己の分析対象としたがここでは科学は「考古学」の唯一無二の対象という訳ではなかったのに対し、《La science et la vérité》においてラカンは精神分析が対象とするのは科学での主体だとする。ここでラカンは科学以外の形態として呪術と宗教を並べているが、呪術、宗教、科学の三者はどのような次元で並べられるのだろうか？ラカンによればそれはそれぞれ主体と「原因としての真理 (la vérité comme cause)」との（「位相幾何学的な」）関係のあり方で分かたれる。レヴィ＝ストロースの呪術の分析に依拠しつつ、そこでは呪文とそれがなんらかの作用を及ぼそうとする「もの」の世界の対象は結びついており、呪術が効果的である時、すなわち呪文と「もの」の世界が対応をなす時、「もの」の世界の呪術師という個体に「原因としての真理」は位置を占める⁽⁷⁾。呪文という言語的なセリーと「もの」のセリーの対応を裏付けているのはここでは呪術師である。宗教に関してラカンがここで取上げているのはカトリックである（正教会と仏教も同様な関係の分析を施せるとしているが⁽⁸⁾）。科学がいわば「原因としての真理」を主体から「排除 (Verwerfung, forclusion)」するのに対し、宗教では「原因としての真理」は「否定 (Verneinung, dénégation)」される。すなわち「原因としての真理」は神という他者に委ねられ、宗教における主体は自身からそれを「否定」する（il (le religieux) coupe là son propre accès à la vérité.⁽⁹⁾）。それに対し科学では「原因としての真理」を「排除」するというのだが、「排除」と「否定」の違いは（「排除」または「否定」の）対象が無意識に留まるか否かにあり、「排除」では無意識からも締め出される。ラカンは科学における主体をデカルトの *cogito* と共に出現したとするが、また科学における主体の出現にはある「削減」(une certaine réduction) が必要だ、ともしている。これは何を減らすというのであろうか？「原因としての真理」である。ラカンの用語に従えば第一のシニフィアン、すなわち「ファルス」、ということになる。そして無意識から「排除」されたものは「現実界」において欲望の対象 (objet *a*) という形で現われ、主体とはこの objet *a* との関係において初めて発生するもの

である (〈là où c'était, là comme sujet dois-je advenir.〉⁽¹⁰⁾)。ラカンの *cogito ergo sum* の解釈に従えば, objet *a* を追う (*cogito*) ことにより「我あり」(主体の発生) ということになる。すなわちここで科学とは objet *a* とそれを求める主体 (*cogito* の運動) との関係の産物であるが, そこでは主体は「原因としての真理」を「排除」されているのだから, また科学の主体である限りそうあり続けるのだから, 「知」(科学) と「(原因としての) 真理」は互いに他者であり続ける。ラカンが 〈la vérité comme cause, elle (la science) n'en voudrait-rien-savoir〉 とするのは「真理」を知らない(「排除」する) 限りにおいて科学は成り立つということで理解される。主体は「知」と「真理」の狭間 (〈Spaltung〉) にあり両者を「縫合 (*suturer*)」する位置にある (〈Ce point est un nœud.〉⁽¹¹⁾)。ラカンの展望によれば論理主義は主体を科学に取り込む試みとされ, ゲーデルの不完全性定理によりその不可能性, すなわち科学が「真理」に到達することはありえないこと (「他者」があり続けること), が証明され, 構造主義により主体と科学の (位相幾何学的な) 関係を前提にすることで「人文科学」は展開されることとなる。精神分析とは主体と objet *a* の関係を解読することであり, objet *a* が問題とされるからには「真理」は「排除」されていなければならない。よって精神分析の対象は科学における主体に限られる。

こうして観点からすると精神分析は科学であるのかという問題は意味をずらしてくる。精神分析において科学とは主体と objet *a* との関係による産物とみなす限り科学とは分析者の見地からすれば主体と objet *a* の相克の結果である症状のヴァリエーションということとなろう。実際そうした見地からの科学者の伝記をラカンは示唆している⁽¹²⁾。フロイトが芸術を精神分析の展望の下に見たのと同様ラカンは科学の発展上の動きを精神分析の領域に治めようとするならば, 精神分析と科学の関係はフロイトが精神分析を科学として認知させようとする努力, その是非を問う議論⁽¹³⁾とは別の次元で問題となってくる。

以上フーコーとラカンそれぞれの科学に対する距離を見てきた。フーコーにおいては科学はある規定を伴った言説空間である「知」のとりうる一

つの可能性であり、言説の一つとして科学の形成を言説間の関係を分析する「考古学」の対象とすることが出来る。「知」の一つに過ぎない科学は他の知と同列に置かれ相対化される。そこでは対象とした言説に科学性があるかいなかという絶対的な価値判断を絶つことで言説間の「権力闘争」を叙述するのであった。一方ラカンにおいて精神分析の対象とは科学での主体であり、科学とはその主体の形成の構造、すなわち「真理」の「排除」と「真理」の objet *a* としての回帰、および主体と objet *a* の関係の下、その結果として読み解かれるものであった。その限りでは科学は芸術や精神病の症状と同列に並べられる。ここでフーコーもラカンもそれぞれ科学の発生を解くことができる立場に身を置くことで科学性の問題をずらしている。「知」における言説間の関係、主体の形成とともに、その教義上、科学以前の問題を扱っている。こうしてそれぞれの「考古学」も精神分析も科学の枠内では捉えられない。そうすると、「考古学」、精神分析とも *méta*-physique なのか、そうでなければ「考古学」を語る言説とは、また精神分析の主体とは何なのか、という問が浮かび、フーコー、ラカン共にこの点に関し敏感であった。

1955年のウィーンでの講演会での有名な〈Moi la vérité, je parle〉の発言から⁽¹⁴⁾そうした問題意識は覗えるがラカンはそれをの位相幾何学を採用することで精神分析の主体の入り組んだ関係を解いて行く方向に進んだと思われる。本来1965年12月1日の講義であった《La science et la vérité》でも位相幾何学への関心は覗えるが(主体の裂け目 (clivage) をメビウスの帯になぞらえたのは前年度の講義においてである)、例えばボロメオの結び目を持ち出すのは1972年とさらに後年になっても位相幾何学への言及を放棄しなかった。その内容と是非についてはここでは扱わないが、表裏一体のメビウスの帯 (le sujet est en exclusion interne à son objet)⁽¹⁵⁾ や三つの輪 (ここではそれぞれ「現実界」と「象徴界」と「想像界」を示す) が相互依存するボロメオの結び目の引用は、精神分析の言説の位置を相対化し、他者と接するなんらかの場を想定することで *méta* 性の解消 (階層間の絶対的な峻別の廃棄) を指向しているといえよう。

一方フーコーは *L'Archéologie du savoir* の対話形式の結論において自ら以下のような問を投げかける、

quel est alors le titre de votre discours? D'où vient-il et d'où pourrait-il tenir son droit à parler? Comment pourrait-il se légitimer? ... si vous prétendez ouvrir une interrogation radicale, si vous voulez placer votre discours au niveau où nous nous plaçons nous-mêmes, vous savez bien alors qu'il entrera dans notre jeu et qu'il prolongera à son tour cette dimension dont il essaie pourtant de se libérer⁽¹⁶⁾.

それに対しフーコーは己の言説の位置を確定せず、「宙吊り」にすることを選んでいる。自らのいる「知」の場に関しては言及しない戦略をとる（〈mon discours, loin de déterminer le lieu d'où il parle, esquive le sol où il pourrait prendre appui〉⁽¹⁷⁾）。しかしここでフーコーは「考古学」が科学でないことを逆手に取り、「考古学」は言説に関する普遍的な理論や法則を確立するものではないとする。それは言説間の対立や矛盾を解消することを目的とせず差異を差異として残すし、自らの言説も「知」の場に差異を生産し続ける。ラカンが敢えて自らの語る場を取込み、考慮に入れることで己の言説を錯綜としたものにしていったのに対し、フーコーはラカンにあっては結節点として特権的な位置を占める主体を言及の「外」に置くこと、そうした主体の形成の重視になんらかの中心性を見、自らの言説の主体を対象としない限りで「知」における言説間の関係を「中立」的に扱うことが出来た。しかし自らもなんらかの「知」の中にあるという前提はそれが普遍性を目指すことを許さない。そうした言説のはいつまでも宙吊られたままであろう。ラカンの観点からすればそれはまさに「真理」が「排除」された状態に他ならない。ラカンの戦略は分析対象である科学での主体と精神分析の主体を区別し、後者の位置を定めること（〈Moi la vérité, ...〉の位置）、「真理」との関係に基づいた位相幾何学的な意味で、にある

が、そのとき始めから精神分析の主体の位置に身を置くのでなければその理論形成は科学と同じ次元にあり、分析された（されうる）もので分析するものを説明するまたは分析するものは分析の対象になるのかという自己言及のパラドクスが常につきまともれることになる。フーコーにあってはどのような形にしろ「真理」といったものを前提としての科学の主体から精神分析の主体への飛躍は禁じられている。こうして見たとき両者の構造主義が無意識の構造を指摘したことに発する主体の問い直しに対する姿勢の違いは、ラカンにあっては主体を一つの構造とみなすことで相対化するがそこでは自己言及のパラドクスが生じるが、また自己言及のパラドクスを取って取込むことで *méta* 性から逃れようとする。一方フーコーは己の言説の主体を「外」、いわば絶対的な無意識に取って置くことで不可知に留め、他の「知」での他の言説の主体を分析する場を己に許している、と言えようか。

注

- (1) *Dits et écrits*, Michel Foucault, Gallimard, 1994に付された年表による。
- (2) *L'Archéologie du savoir*, p. 248.
- (3) *ibid.*, p. 182.
- (4) *ibid.*, p. 199.
- (5) *Cahiers pour l'analyse*, N°9, été 1968, p. 33.
- (6) *L'Archéologie du savoir*, p. 243.
- (7) «Le sorcier et sa magie» et «L'efficacité symbolique» in *Anthropologie structurale*, Claude Lévi-Strauss, Plon, 1958.
- (8) ラカンがここで示唆するカトリックの *Filioque* と正教の *Per Filium* との精神分析からの見解は Julia Kristeva の «L'Europe divisée: Politique, Éthique, Religion» in *L'Infini*, septembre 1998, Gallimard.
- (9) *Écrits*, 1966, Seuil, p. 872.
- (10) *ibid.*, p. 864.
- (11) *ibid.*, p. 877.
- (12) *ibid.*, p. 870. そのような線に沿ったものとして *Infini et Inconscient Essai sur George Cantor*, Nathalie Charraud, Anthropos, 1994.
- (13) こうした方向でのラカンにおける科学性の議論は *Lacan de l'équivo-*

que à l'impasse, Francois Roustang, Minuit, 1986.

(14) *Écrits*, p. 408.

(15) *ibid.*, p. 861.

(16) *L'Archéologie du savoir*, p. 267.

(17) *ibid.*, p. 267.